ちはやぶる宇治川と、もののふの宇治川

2019.8.　太田蓉子

琵琶湖から流れ出る唯一の川・瀬田川(大津市)が、京都府(山背 後に、山城)に入ると**宇治川**と呼ばれます。宇治川は、南西へ蛇行しながら巨椋おぐら池(宇治市、京都市伏見、長岡京市にまたがって存在した巨大な池。豊臣時代から形を変えるが昭和初期まで存在した。)に流れ込みます。そこで、南東からの木津川、北西からの桂川と合流し、淀川となって大阪府(摂津、河内)へ入ります。 (p.4に、想像図)
飛鳥・奈良時代、これらの川は、大和、山背、近江、更に越しの国北陸を結ぶ水路で、人や物資を運ぶ重要な交通路でした。大和からは、北端にある平城山を越えて山背へ入り、木津川を下って巨椋池に入ったのです。天智天皇の近江大津京への遷都、6年後、天武天皇の飛鳥浄御原への再遷都、大移動の壮大さと困難さが想像されます。　(平城山(奈良山)から北上し、宇治川を渡り、逢坂山を越えて近江に至る陸路もある。奈良時代には、近江国府を瀬田川の東岸の地に置いた。)

万葉集には、宇治川を詠んだ歌が１４首もあります。
最もよく知られている歌は、「柿本朝臣人麻呂、近江の国より上り来る時に、宇治の川辺に至りて作る歌」(持統朝・藤原京時代初期の作と見られる)です。

「　**もののふの　八十やそ宇治川の　網代木あじろきに**
**いさよふ波の　ゆくへ知らずも　**」(３－２６４)
(宇治川の網代木にしばし滞りいさよう波、この波はいったい何処へ流れて行くのであろうか。(いく末が分からないのは、わが身も同じだが。))
(網代木は、魚を捕るため川の瀬に打ち渡した杭。そこに竹や柴で編んだ網を掛ける。)

「もののふ(物部)」は、「朝廷に仕える文武百官」の意で、「八十やそ」(数が多い)に掛かる枕詞として用いている。
これをさらに、「もののふの 八十氏やそうじ(物乃部能 八十**氏**)」つまり「文武百官の数多くの氏うじ(氏族)」と言い、「ウジ」の音から「宇治川(**氏河**)」を導いたのは、人麻呂の創作だと思われます。
幾つもの川が合流し、多くの人や物が行き交う「宇治川」を連想させたかったのでしょう。また、近江からの木材が藤原京の建築材料として運ばれている昨今、都の建設に、大勢の官人が奮闘していることを暗示したのでしょうか。

しかし、もともとは、「宇治川」に掛かる枕詞は、「**ちはやぶる**」であったと思われるのです。
「ちはやぶる」は、「**神**」に掛かる枕詞としてよく知られており、万葉集に12首、

古今和歌集においても８首の歌（在原業平の「竜田川の歌」が有名）に、見えます。
「ちはやぶる」は、「**逸早**やいちはや」から来たもので、最速、最強を意味するところから、「活力に満ちた」「荒々しい」の意味であるとする見解。また、「ち・ティー」は、「霊力」を表す言葉であるから「霊力が盛んな」意味にもなる。つまり「強大な力を持つ」意から、「神」に（従って「氏」にも）掛かる枕詞となった、と述べるのが、いろいろな古語辞典に見られる見解です。
ところが、今回、「ちはやぶる」の意味を調べていて、仙覚（鎌倉初期の僧、万葉学者）は、「**道ミチ速ハヤ**」が「ちはやぶる（道速振）」）の原義だと唱えていることを知りました。　　（「振」は、「振り」。様子、風ふうの意。）
また、地名の「宇治」は、「兎ウの道ミチ」（けもの道）又は、「**諾ウベなる道ミチ**」「宜しいと判断される道」の意から来ていると言う。（国語学者・吉田金彦氏の説）
「**チハヤ（ブル）ウジ**」は、「**無事に通ることができる早道・近道**」と言った意味で、もともと「**宇治（川）の渡り**」そのものを指す詞であったと見えます。と同時に、この激流を「無事に渡らせて下さいとの願い」を込めた詞であったと思われるのです。
万葉時代よりも古くから唄われていた長歌歌謡を集めた巻十三、そこに、大和から近江に向かう人が、旅の安全を願って唄っていたと見られる歌があります。
「そらみつ　大和の国　あおによし　奈良山越えて　山背の　管木つつきの原
ちはやぶる　宇治の渡り　、、、、、我は越え行く　逢坂山を」（１３－３２３６）
（古歌を組み入れた 3240 番歌にも例）
「古事記」（応神天皇条）にある物語の中の歌にも、
「ちはやぶる　宇治の渡りに　棹さを執りに
速はやけむ人し　我が仲間もこに来こむ」
（応神天皇の長男・大山守命オオヤマモリノミコトが、次の大王となる異母弟・ウジ菟道ノワキイラツコを殺そうとしたが、逆に計略にかかって、宇治川に落とされた時に「宜しい道と言う宇治の渡りだ、棹を操るのが素早い人が、私の味方としてやって来るだろう」と歌ったと記される。（現れたのは弟・ウジの軍勢で、そのまま流されて沈む。（後には、別の異母の王子・オホサザキが仁徳天皇となる。））

宇治川は、要衝の地でありながら通行の難所である故に、神に無事を願わねばなりません。しかし、度々の戦や、大雨で増水した激流によって、命を落とした人は多く、「宇治川の神」は、次第に「荒ぶる神」と見られたことでしょう。
また、ヤマト政権の王族が信奉する神、自らをその神の子孫と名乗る大王の軍が、畿外各地の土着の神と人とを凌駕していく様子から、「神」は、「恐ろしい威力を持つもの」と見られるようになったとも考えられます。
「チハヤ　振ル」は、「千磐チハ破ヤブル（岩を砕く）」（404 番、558 番歌に例）　とも記され

るように、「神」を連想する詞となります。替わって「宇治川」には、人麻呂の言う「もののふ」や「氏」が、枕詞として相応しいと見られるようになったと思われます。　（3237 番、2714 番歌に例）

しかし、こんな歌を詠んだ人がいます。（作者不明、奈良時代の作か）

「ちはや人　宇治川波を　清みかも
旅行く人の　立ちかてにする」　（７－１１３９）

（（昔、「ちはや人（千早人）」がいたが）今は、宇治川の波があまりにも清らかなので、旅行く人が立ち去りかねている。）

ここでの「ちはや人」は、「道を急ぎ過ぎて、宜しき道・宇治川で命を落とした人」を想っているようです。

それは、先の「古事記の話」の続き、宇治川に沈んだ大山守命の遺体を、岸に引き上げた時、弟・ウジが詠んだ次の歌を踏まえていると思われます。

「ちはや人　宇治の渡りに　渡り瀬に　立てる　梓弓あづさゆみ檀まゆみ
い伐きらむと　心は思へど、、、、、、　い伐きらずぞ来る」

（（道を急いだ人、そのため流され亡んだ人、その）宇治川の渡し場に立っている檀の木（遺体の喩え）、切ってしまおうと心には思うが、、、（父や妹のことを思い出して）、、、切らずに来た）

また、「川に寄せる恋の歌」として詠まれたこの歌（柿本人麻呂歌集」に）も、先の「話」を踏まえているようです。

「ちはや人　宇治の渡りの　早き瀬に
逢はずこそあれ　後は我が妻」　（１１－２４２８）

（（急ぎ過ぎて川を渡れなかった人がいた、あの）宇治の渡し場の流れ、そんな激しい流れに邪魔されて今は逢えないでいるけれど、あの子は、後には我が妻となる人なのだ。）

そして、こんな歌があります。

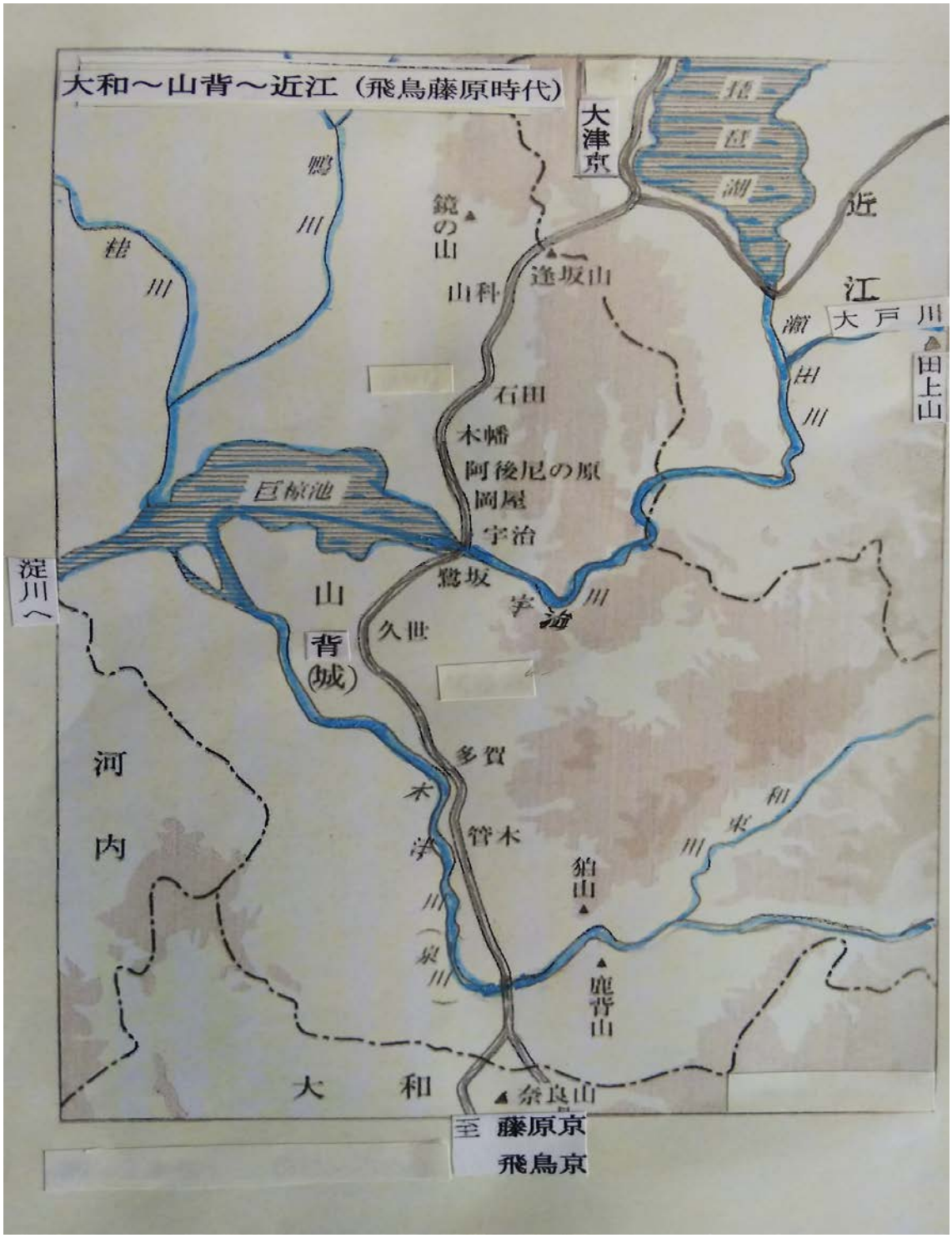
「宇治川は　淀瀬よどせなからし　網代人あじろひと
舟呼よばふ声　をちこち聞きこゆ」　（７－１１３５）

（宇治川には歩いて渡れるような緩やかな川瀬などないらしい。網代を仕掛けて漁をする人が、舟を呼び合う声があちらこちらから聞こえてくる。）

この歌の作者は不明ですが、「宇治川」に、枕詞は、付けていません。

この人は、「宇治川」には、「ちはやぶる神も人」も、「もののふも、氏」も要らない、ただ「網代人」の声だけがあればいいと思ったのではないか。

“岸辺に立って、川面を渡る網代人の舟呼ぶ声を聞いていると、激流逆巻くこの川は、なくてはならない恵みの川だと、「宇治川」を在りのままに称えたくなるのだ。”　そんな思いを表した歌とも、見ることができます。



図は
伊藤博「万葉集・釋注」巻第十三の図から一部を削り付け加えたもの